



特設「棚田写真ダウンロード」サイト
期間限定 2019年3月29日（金）まで

熊本県農林水産部農村振興局むらづくり課
TEL：096-333-2415 FAX：096-385-5025
〒862-8570 熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号



マスコットキャラクター「ダンダン」

美しい棚田のあるむらへ。
明るいひとがいるむらへ。

撮影場所：
上天草市大作山

中山間地域サポート推進事業
熊本県むらづくり課

美しいむら、いっぱいあります。

熊本は「農」の国。平野で、海で、そして山で、さまざまな農林水産に密着した暮らしを、多くの人々が営んできました。とてもとても長い間。

棚田に代表されるような中山間地域の住民活動は、農業の大事な機能というだけでなく、暮らす人々の心映えであり、それゆえに都市生活者の憧^{あこがれ}を集める観光資源ともなります。

この冊子は古くから、熊本県で支援をおこなった中山間地域サポート推進事業を振り返り、代表的な4つの事例をご紹介します。美しい風景、豊かな文化、それらを紡いできた明るい人々を、ぜひ、訪ねてみてください。

棚田、むらづくり、4つの地域、4つの個性。

- 
- ◎きらり水源村、菊池おいしい村づくり — 02
閉校した中学校を活用した宿泊体験施設を拠点に、農業体験やイベントなど年間を通したプログラムを実施する、大人気のむらづくり。
 - ◎山都町菅、棚田ふれあい探訪ツアー — 04
かつて「陸の孤島」と呼ばれた山間地の村が、取り組む魅力的なむらづくり。深い渓谷に架かる鮎の瀬大橋からの絶景も見応えがあります。
 - ◎上天草市、棚田ふれあい探訪ツアー — 06
天草上島、龍ヶ岳の中腹に位置する大作山地区。「日本の棚田百選」にも選ばれた千枚田には、島原の乱からの復興という歴史が刻まれています。
 - ◎頭石(かぐめいし)・湯の鶴村丸ごと生活博物館 — 08
平家の落人伝説が残る、山間の村。かつては林業で栄えた地区が林業衰退の時を迎え、新たなむらづくりへと立ち上がりました。



中山間地域サポート推進事業について
詳しくは、ふるさと応援ねっとHPをご覧ください。

◎ 菊池市 NPO 法人きらり水源村 菊池おいしい村づくり

地域がまるごと NPO 法人!?

愛着のある校舎は、都市間交流と地域自治も担う場に。

NPO 法人きらり水源村 菊池市原 1600 TEL : 0968-27-0102 HP : <https://www.suigen.org/>



日本遺産に認定された米文化。

熊本県北部に位置する菊池市。菊池川の豊富な水が潤す田畑では、米をはじめとする農作物がつけられ、中世には菊池一族が栄華を極めたことでも知られます。弥生時代から続く米作りは、歴史や文化にも大きく影響しています。「米作り、二千年にわたる大地の記憶～菊池川流域 今昔『水稻』物語～」として 2017 年、県内 2 例目の文化庁が認定する日本遺産に認定されました。



菊池川流域は熊本有数の米どころ。

江戸時代生まれの井手は今も活躍。

菊池市には、古くからの農業用水路が各地に点在しています。菊池温泉街から車で 10 分ほどの水源地区、日本遺産の構成資産にも数えられる「原井手(はるいで)」もそのひとつです。元禄 14(1701)年に完成し、菊池溪谷の水を山間部の田んぼへ送りつづける現役の井手(用水路)。「マブ」と呼ばれる用水路のトンネルなどをカヤックで下る「イデベンチャー」が人気を集め、水田に水を引き入れる時季になると、県内外から多くの人を訪れます。



井手を下るイデベンチャーには多くのファンが。



きくちふるさと水源交流館

都市部からリピート多数の農山村体験。

イデベンチャーを運営するのは、「NPO 法人きらり水源村」。旧菊池東中学校を活用した宿泊体験施設「きくちふるさと水源交流館」では、「菊池おいしい村づくり」と題し、米作りを中心とした通年の農業体験プログラムを提供。都市部の親子が農山村の魅力に触れる機会として人気を集めています。家族でリピートする人も多く、小学生の頃に参加していた体験 OB が後年、高校生スタッフとして参加するなどの定着ぶりです。

菊池の棚田。地域の人々が長年にわたって育んできた農業の大変さと恵みの豊かさを物語ります。



◎ 山都町 菅地域振興会 棚田ふれあい探訪ツアー [開催時期：毎年7月～11月]

住民が主体となって考える自治と地域活性。 多くのファンを育む、豊かな里山の暮らし。

菅地域振興会 事務局：株式会社まちづくりやべ 上益城郡山都町浜町 239-3 TEL：0967-72-1723

暮らしの息づかいを感じる棚田。

山都町の南側、標高約 400mに位置する菅（すげ）集落。九州脊梁山地と阿蘇外輪山に囲まれた山間には、約 400 枚もの棚田が広がっています。田と田の間に昔ながらの日本家屋や石蔵、自家菜園が点在し、随所に暮らす人々の息づかいが感じられるのもここならではの魅力。日々の営みがつくる絶景は、農林水産省の「日本の棚田百選」にも選ばれました。九州山地の山々から集められた水を棚田へ運ぶのは、全長約 6km の「羚羊（れいよう）井手」です。



九州山地から運ばれる美しい水。

集落の営みを支える豊かな農地。

「通潤用水より約 20 年も早くつくられたこの用水のおかげで、米の収量は 10 倍近くに増量し、暮らしが一変したと聞いています。水があり、豊かな農業をできる土地がある。それこそが菅の価値であり、私たちがこの地で暮らし続ける理由」と、菅地区振興会長の梅田さんは話します。梅田さんたちはこのような“ふるさとの今”を形づくる歴史や営みに光を当て、後世へ伝えようとさまざまな試行錯誤を重ねてきました。



鮎の瀬交流館は、地域の交流拠点。

住民たちの熱量から生まれる魅力。

休耕田を活用し、都市部の人へ農山村の営みに触れる機会を提供する「棚田オーナー制度」はそのひとつです。住民の意見を盛り込み、設計された「鮎の瀬交流館」で夜なべ談義を行いながら、苔や蔓などの工芸体験を盛り込んだ独自の「棚田ツアー」を考案。郷土料理や里山暮らしの体験を収益化し、U・I ターンも見込んだ取り組みへとつなげています。熱量の高い住民主体の取り組みが、多くの菅ファンを育てています。



菅地域振興会の皆さん。



◎ 上天草市 大作山地区住民組織 棚田ふれあい探訪ツアー [開催時期：毎年10月下旬]

少子高齢化が進む集落に子どもたちの歓声が戻る日。 年に一度の交流が、集落存続の一手になることを夢見て。

大作山地区住民組織 上天草市大矢野町上 1514 TEL：0964-26-5516（上天草市役所 農林水産課）

300年以上の歴史を持つ棚田。

天草上島の南岸、龍ヶ岳（標高約470m）の中腹にある大作山地区。ここには、300年以上の歴史を持つ棚田があります。「島原・天草一揆」後、幕府直轄の天領となった天草に初代代官として赴任した鈴木重成は、人々の暮らしを復興させるために数々の手を尽くしました。この棚田もそのひとつです。総面積約10ha、110枚もの広大な棚田が広がる光景は「大作山の千枚田」と名付けられ、農林水産省の「日本の棚田百選」にも選ばれました。



棚田ツアーで催されたイモ掘り体験。

林業衰退、減反。模索を続ける集落。

稲作とともに、この地域を支えたのは林業です。一帯はかつて製紙会社の山として管理され、燃料となる薪の生産を行う兼業農家も多かったといいます。「熱源が薪からガスへと変わったことや減反政策の影響もあり、兼業農家でも生活がなり立たなくなった。一時は、転作作物としてタバコの栽培が盛んになった時期もありましたが、1972年の水害ですべてダメになりました。田畑を立て直す人、他の仕事を掛け持ちする人、集落を離れ



ツアーの楽しみ、郷土料理。写真はちりめんご汁。



龍ヶ岳展望所からは
美しい海と島々が一望。

て出稼ぎに行く人など、それぞれに生きる道を探してきたんです」と話すのは、大作山住民組織の山崎さんです。

誇りでもある棚田が活気づく日。

「幕府が開拓し、先祖代々守られてきた棚田は私たちの宝。守る方法はないかと考えていたときに、『日本の棚田百選』に選ばれたのをきっかけに“棚田ふれあい探訪ツアー”が始まりました。少子高齢化が進むこの地にとって棚田探訪ツアーは、集落が活気づく日。この交流が集落存続の一手につながることを、山崎さんたちの願いです。



平家落人の伝承が残る集落。林業の衰退とともに危機を迎えた地域に活気を呼び戻したのは、この地の営みそのものでした。

頭石・湯の鶴村丸ごと生活博物館 水俣市湯出917 TEL:0966-61-1607 FAX:0966-62-0611 (水俣市役所 総務課 地域振興係)

平家の落人伝説が残る山間の秘境。

水俣市中心部から車で約30分。静かな山間の湯出川沿いに広がる「湯の鶴温泉」は約700年の歴史を誇る湯治場です。一羽の傷ついた鶴が湯浴みで傷を癒やす姿を見た平家の落人によって温泉の存在が見いだされ、その名がついたといわれます。そして、湯の鶴温泉の上流にある頭石（かぐめいし）もまた、平家の落人伝説が残る場所。「壇ノ浦の戦い」で源氏に敗れた平家一門の人々が逃げ延び、山を拓いたことがはじまりとされています。



棚田で稲刈りの作業中。

集落の存続危機に立ち上がる住民。

山の傾斜に沿って石積みの棚田や家々が並ぶ頭石集落。鹿児島との県境の谷筋にあり、林業が盛んだった30年前程までは約450人が暮らしていました。ところが、林業の衰退とともに過疎化が進み、2002年の人口は40世帯約140人になりました。集落の存続に危機感を覚えた勝目豊さんは、住民らとともに「頭石元気村農林業作業管理部会」を設立しました。山から伐りだす木材を搬出するため、道路の拡張整備などから着手。さらに、水俣



棚田ツアーで振舞われる新米のおにぎり。

市で「元気村づくり条例」が制定されたのに合わせ「頭石村丸ごと生活博物館」の指定を受けました。



地域婦人部の皆さんが棚田ツアーの昼食をつくる。

営みの体験に国内外にファン多数。

住民自ら地域の中にある宝に目を向け、都市住民との交流を通じて地域を活性化する取り組みです。その一環として、「頭石・湯の鶴まるごと自然学校」を行い、この地の風土にふれる村めぐりや郷土料理のもてなし、生活の知恵の伝承といった頭石ならではの体験を提供。国内外から多くのファンを集めています。



村を案内する村丸ごと生活博物館代表の勝目豊さん。背景には石積みの棚田が広がっています。

美しいむらがあります。 元気なひとがいます。

地域の魅力はそこに生きる人々が発見し、育み、磨いていくものです。
魅力的な地域には、魅力的でたくましい人々が生きています。4つの地域、4人の代表者の方へのインタビューを行い、地域の現状やビジョンについて語っていただきました。



NPO 法人きらり水源村
岩崎 良美さん

水源地区にある9つの行政区のなかの1区長として、「NPO法人きらり水源村」理事長を兼任。
農業者として椎茸・えごま・キャベツなど、
また林業も生業としている。



稲刈り体験

▶「NPO法人きらり水源村」は、9つの旧行政区の区長らが理事を務め、地元の住民だけでなり立つNPOとしても注目されています。その発端は「菊池東中学校」の閉校が決まった2000年のこと。さかのぼれば1947年、「水源中学校」として創立した学校で、建設にあたっては当時の中学生や地域の人が、菊池川の川原から石をひとつひとつ運びだし、学校の基礎を造ったと聞いています。今も残る木造校舎は、当時の村有林を活用してできたもの。

▶そんな背景もあり、この校舎に強い思い入れを持つ住民が多かったのでしょう。閉校の話が持ち上がると同時に、住民のなかで校舎の保存と利活用の声が高まり、協議会を設立。市から指定管理を受けて校舎を運営するためのNPOを立ち上げました。

▶学校は、地域のコミュニティ維持になくてはならない場所。地域内外の交流を図る場として何が必要か、みんなで協議を重ね、活動の主軸を決めていきました。都市部の子どもたちに水源地区の農業や暮らしの体験を提供する「おいしい村づくり」に加え、地元の野菜部会が中心となって活動する「新規就農支援」、郷土料理の継承を目的とした「食の文化祭」、森林の活用法を学ぶ「水源森の楽校」などの活動を行っています。

▶「人築(にんじゅく)」というこの地ならではの支え合いの文化もありますが、高齢化が進むにつれてできないことも増えていくでしょう。NPOの活動を通じて外との関わりを持つことで、こうした課題を解決していくのが今後の目標です。



菅地域振興会
梅田 幸雄さん

振興会の前身となる「長男会」時代から、
地域の中にある資源や人材の価値をみんなで発掘し共有、
自立型の営み形成に取り組む。

▶菅の暮らしを語る上で忘れてはならないのが「鮎の瀬大橋」の存在です。緑川渓谷によって隔てられていた菅はかつて、「陸の孤島」と呼ばれていました。ひとたび大雨が降れば、半年も孤立状態が続くこともあったほどです。

▶住民自ら用地交渉を行うなどし、ようやく橋が架けられたのは1999年のこと。矢部をはじめ、周辺のまちと菅集落をつなぐ生命線ともなるこの橋は、集落に多くの希望をもたらしました。その一方で、住民の約3割が、外への行き来が簡便になることで集落の中のつながりが薄れてしまうのではないかと不安視してもしました。地域の振興を考える有志で結成していた「長男会」では、これを問題視。集落の景観や神社仏閣、産物など、菅の営みから生まれるものの価値を住民自らが再認識し、どうかしていくのかを考



鮎の瀬大橋

えるため、話し合いを重ねました。

▶子どもからお年寄りまでを集めたワークショップを何度も実施。そのなかで、地域の輪を深め、外の人を出迎える、「縁側」的な場として誕生したのが「鮎の瀬交流館」です。

▶「地域の活力は、地域のみinnで作る」という雰囲気は、昔からこの地に根づいている気風なのかもしれません。通潤橋のさらに以前に、布田保之助のおじがつくった「羚羊井手」がいい例です。振興会の一連の活動については、国や県の補助事業の活用を最小限にとどめてきました。核となる部分は自主事業とし、広報など+αのものを補助事業で行うなどすることで、無理しすぎず持続可能な取り組みを心がけています。



大作山地区住民組織

山崎 司さん

林業や大工との兼業で農家を続け、今に至る。
大作山地域の歴史や文化に造詣が深く、
「大作山の千枚田」を守る施策を試みる。

▶農林水産省の「日本の棚田百選」に選ばれたのをきっかけに、「棚田ふれあい探訪ツアー」が始まりました。私たちの集落では年々、少子高齢化が進み、棚田の担い手不足も深刻です。そこで近年は、天草で親子向けの自然体験イベントなども行う「NPO法人ひとつづくりくまもとネット」と、地元女性たちで結成される加工グループに協力してもらいながら、ツアーの受け入れを続けています。

▶悩ましいのはツアーの開催時期。この一帯は早期米がほとんどなので、収穫時期が夏場になってしまいます。収穫体験イベントを行うにはいろいろな心配も多い季節です。そこで、「ふれあい探訪ツアー」は秋に開催し、天草で米と並ぶ主食として親しまれるサツマイモの収穫体験を実施。その年の新米と、上天草の食材を使った郷土料理のランチ

稲刈り後の棚田



などをセットにしたツアーは、小さなお子様を連れてご家族の参加も多く、子どもが少なくなった集落に賑わいが戻る機会にもなっています。ただ、ツアーを始めた当初に比べると、受け入れ側の私たちも年を重ねました。これまでと違った形の交流や、担い手の育成を考える時期になってきましたね。

▶高台の棚田は、平たんな田んぼとは違って機械も入れにくく、法面や石積みも含め、草刈りなどの作業にも何倍もの労力がかかります。そうした作業の手を借りながら、先人たちがどんな思いで山を開拓し、自然と向き合う暮らしをつづけてきたかを考えるツアーに移行していければ、子どもたちの「生きる力」を育むことにつながるかもしれないと思います。

棚田の石積み



頭石（かぐめいし）・湯の鶴村丸ごと生活博物館

勝目 豊さん

長年、県のふるさと水と土指導員や市の農業委員を務め、
現在は行政と住民と来訪者をつなぐ立場に。
住民主役の取り組みに徹し、孫世代への営み継承も図る。



▶頭石は山深く、以前は外から人が訪れるような集落ではありませんでした。ですが、「頭石村丸ごと生活博物館」や「棚田ふれあい探訪ツアー」の活動を通じて、地域の中にある宝を磨き続けたことで、今では国内外から年間1000人を超える人が訪れる集落になりました。いろいろな模索を続ける中で、県や市など行政の支援があったからこそチャレンジできたこともたくさんあります。

▶でも一方で、補助事業に頼りすぎると地域はダメになる。私たちは活動当初から、案内料やもてなしといった体験料のなかから賃金を払い、高齢者の小さな経済につなげることを意識してきました。また、体験料の1割を地域の財産として蓄え、補助事業から自立する準備も行っています。補助金や助成金を使うことは、責任が生まれるということです。

▶たとえ集落で新たな開発を行っても、跡を継ぐ子どもたちがいなければ無駄になってしまう。頭石を守るための後継者づくりが、これからの私たちの課題です。子ども世代の多くが外へ働きに出ている今、集落の中で一生懸命活動を続けてきた人も次第に高齢化し、このままではせっかく手を掛けた田畑が耕作放棄地に戻ってしまいます。

▶そこで私たちが実行しているのが、子どもの世代に少しずつ田畑の仕事を譲っていくこと。たとえ今は週末農業でも、いずれ定年したときに頭石へ帰ってきてもらえばそれでいいと考えています。同時に、高齢者と孫の世代が仲良くなることにも努めています。豊かな自然や営みなど頭石の良さを楽しみながら伝えることが、この集落の営みを次の世代へ繋いでいく足がかりになると考えています。